

「Jリーグがある街」の効果

平野 恵子

長崎にJリーグチーム『Vファーレン長崎』(V長崎)が誕生して五シーズン目を迎える。四年間で二回のJ1昇格プレーオフを戦い、昇格は逃したが、一部のファンから「最強の新参者」という異名も頂戴した。昨シーズンは物足りない成績だったが、V長崎がJリーグに昇格してから丸四年で長崎ではどのような変化が起きてきたのだろうか。

JリーグはJ1、J2、J3の三カテゴリーからなり、現在五十七チームが参加している。Jリーグチームがない都道府県は宮崎、高知、島根、和歌山、奈良、三重、滋賀、福井、青森の九県だけだ。Jリーグには「グラスルーツ(草の根)」という理念がある。自立した企業として存在し、地域に密着して地域の人々とともにスポーツ文化の発展に貢献するという考えだ。V長崎の草の根も少しづつ伸び広がっている。



V長崎から原爆資料館に届けられた平和祈念ユニフォームと千羽鶴。(館の入口に展示)

スタジアムでは毎回選手紹介映像と共に長崎県内の観光地や祭りが映し出される。去年のランタンフェスティバルに高木琢也監督が皇帝役で登場したり、チームの主力選手やマスコットキャラクタ

ター「ヴィヴィくん」が地域の行事や商店街のイベントに登場するなどスタジアムの外でもV長崎に接することが多くなってきた。また熊本震災に対して、チームをあげて街頭募金に立ったり、熊本に駆けつけてサッカー教室を手伝うなどボランティア活動も続けている。ホームの試合ごとに相手チームのサポーターたちが長崎にやってくる。その多くが試合日の前に長崎入りして県内各地を観光している。月二回、年間二十数回のホームゲームに訪れる他チームサポーターは定期的なリピーターとして長崎の観光に貢献している。チームは全試合の半分を敵地で戦うが、その土地に住む長崎出身者にとつてはこの日が自分のルーツを確認し、仲間たちと長崎愛を叫ぶ日になる。東京にはすでに応援をリードするグループも立ち上がったようだ。ホームでもアウェイでも、V長崎の試合が多くの人たちの出会いと交流の場を作っている。長崎の観客はJリーグの中でも女性の比率が最も高いという特徴がある。スタジアムのある諫早では中高年が主力のサポーターグループがあり、地域のイベントなどにも積極的に協力している。

そのような中で一昨年の夏、長崎らしい試合がホームスタジアムで行われた。原爆祈念日直前の試合で、スタジアムの中では県内のサッカー関係者や少年たちによってPEACEの文字が描かれた。サポーターたちはこの日のため特別に福山雅治の平和ソング「クスノキ」を歌った。そして入場する選手たちは青とオレンジのチームカラーに折り鶴と平和記念像の一部が描かれた特別のユニフォーム姿だった。この様子はローカルニュースや新聞のスポーツ欄でささやかに取りあげられていたが、英国BBC放送のインターネット版ではトップ記事として写真入りで全世界に配信された。

Jリーグでは大先輩の広島チームもまだやっていなかったし、他の

プロスポーツでもなかったスポーツを通して平和をアピールするV長崎の取り組みは、平和を願う長崎の大きなアピールになった。そして昨年その取り組みは続いていた。チームは、原爆忌前後のホームゲームで「平和祈念ユニフォーム」を着用してプレーし、ファンサポーターは「クスノキ」を歌って選手たちの後押しをした。今後も八月の長崎のスタジアムは「サッカーが楽しめる日常は平和であるからこそ」という気持ちで平和の大切さを発信していくことだろう。

V長崎の存在は情報発信だけではない。スポーツを通じた国際交流や集客の将来性も持っている。V長崎は、中国サッカーのビッグクラブ「上海緑地申花足球倶楽部」や世界的にも知られているオランダの「ファイエノールト・ロッテルダム」と業務提携している。トップチームやアカデミーチームの交流や育成指導などとおしてスポーツによる日中、日蘭友好の実績を積んでいくことだろう。

さらに、こんな夢も見たい。昨年のサッカーユーロ選手権でポルトガル代表が優勝したのは記憶に新しい。そのポルトガルと日本の友好の架け橋となっている「長崎日本ポルトガル協会」が今年五十年を迎える。今後の活動の中で未来を担う青少年交流のコンテンツとしてサッカーが使えるのではないだろうか。その時、この街にプロサッカーチームがあることは一助になると思われる。

いや、小難しいことは置いておいて、一度スタジアムに行ってみてはいかがだろう。若男女が大声で歌って拍手して応援するお祭りのような躍動感に新しい文化の芽生えを感じ取ることもできそうだ。幸い試合日も近い。二月二十六日(日)の対「ザスパクサツ群馬」戦でV長崎の新しいシーズンが幕を開ける。

(長崎歴史文化協合理事)



そのような中で一昨年の夏、長崎らしい試合がホームスタジアムで行われた。原爆祈念日直前の試合で、スタジアムの中では県内のサッカー関係者や少年たちによってPEACEの文字が描かれた。サポーターたちはこの日のため特別に福山雅治の平和ソング「クスノキ」を歌った。そして入場する選手たちは青とオレンジのチームカラーに折り鶴と平和記念像の一部が描かれた特別のユニフォーム姿だった。この様子はローカルニュースや新聞のスポーツ欄でささやかに取りあげられていたが、英国BBC放送のインターネット版ではトップ記事として写真入りで全世界に配信された。

風信

○二月三日は節分会
各家 豆まきあり 続いて火吹竹に豆を入れ外に投ぐ 終りて 紅大根入りの祝膳につく(長崎旧記)

○二月五日、日本二十六聖人殉教者の祝日であり、西坂の丘で殉教祭のミサがあった。同日、二十六聖人初代館長故結城了悟神父(パチエコ)神父記念碑建立記念式典もあつた。結城神父は昭和三十五年来崎されて以来、片岡弥吉先生と協力され「キリシタン文化研究会長崎支部」、「長崎日本協会」の創立やトウドス・サントス教会を始め長崎キリシタン遺跡の保存、祈念碑の建立等につき大きな功績を残されている。

○二月十五日 お釈迦様の涅槃会 主として禅宗寺院にては涅槃図を示す。長崎寺町禅林寺の涅槃図には他図では見られない図があると言ふ。それは猫の図が画き加えられているからであると説明されている。長崎の涅槃図の中には唐船持ち渡りの物があり、特に聖福寺、春徳寺の同図は県の有形文化財に指定されている。そしてこの日は、おいしい涅槃粥がいただけそうである。

○季刊紙『らく』を発行されている糸屋悦子女史来訪。『らく』誌が(一社)日本地域振興協会主催 日本タウン誌・フリーペーパー大賞2016を受賞された由報告あり。御祝辞を申し上げました。

○今月ご寄贈いただいた書籍
一、小川隆達氏より『長崎大学医学部創立百五十周年記念誌』温故知新一吉宗・茶わんむし物語』両書ともに長崎地方史研究資料として大いに参考になる書籍でした。
一、土肥原弘久氏より『新聞紙上の坂本龍馬』堺屋修一・土肥原弘久共著(亀山社中)ば活かす会刊・一〇〇〇円+税)、『長崎くんち取材記録』土肥原弘久著(ゆるり書房刊・一〇〇〇円+税)両書ともに長崎学研究に熱意を感じさせるものがありました。

